

論文の内容の要旨

氏名：呂 惠眞

博士の専攻分野の名称：博士（生物資源科学）

論文題名：薬猟考を巡る日本食肉文化の歴史的考察と現代のと畜場における食肉部位の活用・廃棄に関する実証研究

第Ⅰ部 歴史編

序章 本研究の目的および方法論

中華圏から留学してきた筆者は、中華・朝鮮料理では「血」の一滴も余すことなく利用しているのに対し、日本の庶民的な食文化では内臓肉と動物の血液をあまり食さない伝統があると感じた。「なぜ内臓肉をわずか一部しか食べないのか、いつ頃から食べなくなったのか...」との研究上の問いに答えるため、本研究では第Ⅰ部の歴史編において、日本の食肉文化の歴史を紐解く一方、第Ⅱ部実証分析編においては、食肉習慣の現状を把握するため、畜産副生物のうち、どの部位を活用し、廃棄しているのかと畜場に対するアンケート調査を実施した。

先行研究に関しては、畜産副生物の利用率や価格比でみた日本とアジア諸国との比較研究はあるが、食肉の利用部位に着目した食肉文化の相違に関する、日本とアジア諸国を比較した研究はほとんどない。と畜場に関しても、同和問題など社会的な研究は多数みられるが、日本全体のと畜場を俯瞰した研究はほとんどない。本研究は、歴史的観点から日本の食肉文化を論じ、かつと畜場における畜産副生物の活用・廃棄状況に焦点を当てた、これまでにない研究である。

方法論については、第Ⅰ部歴史編では、日本および中国の既存文献など二次資料に基づき、食肉に関する制度面と生活習慣や文化的側面について記述した。また、第Ⅱ部実証編では、豚と牛の副生物の活用・廃棄状況のアンケート調査結果を、① 部位ごとの活用率と、② と畜場ごとの活用率をもとに分析した。2項ロジットモデルでは、活用/廃棄のダミー変数を被説明変数とし、調査年、豚と牛の区別、各部位、と畜場のある都道府県をダミーの説明変数として分析し、活用率を通じて明らかになった点を統計的に検証した。

第一章 “肉食禁止令の詔”から江戸時代末期までの歴史

古代日本の食肉文化は、モンゴル騎馬民族の殺生食肉思想の影響を朝鮮半島経由して受けており、食肉忌避の文化は存在せず、「血」を忌避してはいなかった。

ところが、仏教伝来から“肉食禁止令の詔”（675年）が出された。唐仏教の影響を受けた殺生食肉禁止令は、古代神道思想に混じる”死穢忌”、“血穢忌”と結びつき、大宝律令にも、「穢悪」の文言が盛り込まれた。平安時代に入ると、『弘仁式』や『延喜式』などの律令の中でも、「死、産」とともに「血」が「穢れ」として定められ、人々の間でも強く意識されるようになった。

中国では、『山海経』（前5世紀 - 3世紀と推定）に始まり、『本草綱目』（1596年）で集大成された本草学は草根木皮に加え、動物生薬をも多く含むものであった。他方、日本現存最古の薬物書『本草和名』では、薬物として動植物を収録していた。しかし、室町時代の頃から、食肉忌避論に呼応する形で、植物を主体とした日本的な和漢本草学が進められた。

しかし、食肉禁止令の最中でも、禁止令が守られてきたわけではない。鎌倉時代以降武家社会へと変貌を遂げる中、軍需皮革の需要を満たすべく、各藩とも支配領内に皮革職人を定住させた。皮革職人の長吏頭には大きな権限が与えられ、皮革とともに動物の食肉と薬種が、藩主などに渡る流通ルートが確立され、動物の臓器より製した通経剤・精力剤が江戸城大奥から注文を受けていた。穢れ意識を忌避するため、獣肉の食用を「薬食」と別名で呼ぶようにして、動物臓器を含む肉の隠れ食いが行われていたとの史料が残されている。

他方、現在の沖縄においては、中山国を中心に14～15世紀に中国、朝鮮、東南アジアを結ぶ中継貿易による大航海時代が確立されていた。諸外国との交流の中で、琉球王朝時代に中国の冊封使や薩摩の在番奉行などを饗応するための独特な料理が生まれ、豚や山羊の肉料理が発達した。沖縄における本草学には、動物（豚）の組織や器官で、それに類した人体の組織、器官を補うことができる「以類補類」の影響を受け、臓器類と血液まで利用する食肉文化が育まれた。

第二章 明治以降現代までの食肉の歴史

アメリカ国使ペリーの浦賀来航（1853年）以降、横浜に外国人居留地が設けられ、当初外人達の間で始まった牛肉の商売が広がりを見せた。1871年12月、明治政府は食肉禁止令を廃止した。牛肉に対する需要も高まり、大都市近郊では次々と場が新設されるようになった。大正時代に入ると、戦地に送られた軍需牛肉缶の増加で、内地の牛不足が深刻化し、牛肉より安い豚肉の需要が拡大した。太平洋戦争下では、食料窮迫により物価高騰を招き、物価高騰抑制のために政府は食肉配給や肉類価格などの統制令を出した。終戦後、高度成長の時代には、食生活の欧風化とともに、食肉需要は急増したが、精肉並びに加工肉中心であった。

明治時代以降の内臓肉と動物の血液の消費動向をみると、庶民の間で動物臓器を煮込んで食べていたことが記録されている。他方、日本に滞在中の欧米人が内臓料理を食べたことから、上流社会にも浸透していた。薬種としても、牛の血液が結核患者により活用される一方、結核や脚気などの病気に動物の臓器が用いられることがあった。明治天皇や陸軍が脚気の治療に漢方を用いたことは記録にあるが、明治政府は科学的普遍性に欠けるとの理由から、漢方を医療行為から除外する政策を採った。前述の太平洋戦争下の統制価格リストをみると、豚や牛の臓器など副生物は含まれていたが、血液は含まれていなかった。戦後の高度成長期も需要が急増した食肉の中心は精肉で、と畜場では血液と臓器などの副生物は廃棄されていた。しかし、1980年代から焼肉ブームが起こり、タン（舌）、レバー（肝臓）などが食されるようになった。

戦後から現代まで、内臓肉の消費を阻んだ要因も挙げられる。O-157食中毒事件などにより全国的に内臓生食が禁止された。1990年代以降BSEの流行により、頭蓋や脊髄などの危険部位が定められた。しかし、BSE対策に関しては、2013年以降検査体制が緩和されている。

戦後、豚や牛の臓器類がどうして食されないようになったのかに関し、1941年、1979年、1983年、2003年、2020年の各時点における豚と牛の副生物の可食部位と非可食部位を調べた。その結果、1941年において可食部位に指定されていた内臓部位が1979年以降指定から外されていること、2003年時点で牛の特別危険部位と豚の臓器が非可食部位に指定されたことが明らかになった。

第Ⅱ部 実証分析編

第三章 現代におけると畜場における豚と牛の部位ごとの活用・廃棄状況

アンケート調査は、2015～16年（以下「2015年」とする）と2020～21年（以下「2020年」とする）の2回に渡り実施し、それぞれ21件と11件の有効回答を得た。調査対象部位は、2015年で①脳、②脊髄、③耳介、④外鼻、⑤血液、⑥足、⑦陰茎、⑧精巣、⑨胆嚢、⑩胆汁の9部位で、2020年には、9部位に加え⑪頭蓋、⑫大・小腸、⑬胃、⑭皮膚、⑮臍臓、⑯胎盤、⑰副腎の7部位を加えた。

記述統計の分析結果として、(1)2015年と比べ、2020年の活用率が高い、(2)牛よりも豚の活用率が高い、(3)脳、脊髄、耳介、外鼻、頭蓋に関して、豚と比べると牛の活用率が低い、(4)血液、陰茎、精巣、胆嚢、胆汁の活用率は50%未満と、豚と牛ともに低い、(5)と畜場が存在する都道府県に関しては、政令指定都市を擁する道府県と沖縄での活用率が高い、傾向が示された。

第四章 2項ロジットモデルによる実証

2項ロジットモデルでは、各部位と各と畜場での活用/廃棄を1標本とすることで、712件の標本を対象とした分析を行った。その結果、上述の(1)と(2)の傾向は統計的に有意と判定された。(3)については、脳、脊髄についてはすべてのケースで廃棄されている状況が統計的に有意と判定され、BSEの影響が示唆される結果が示された。なお、さらに各部位×豚/牛のダミー変数の交差項を取ることで、耳介では豚に限定すると活用を示唆する結果が示される一方、牛に限定すると廃棄を示唆する結果が統計的に有意性をもって示された。(4)については、血液、陰茎、精巣、胆嚢、胆汁、副腎、胎盤が廃棄されている状況が統計的に有意と判定され、血液については穢れ意識が歴史的に強かったこと、その他の副生物に関しては、戦後それらの部位で可食部位の指定が外されたことなどが影響した可能性が高いことが示された。(5)に関しては、と畜場ダミー変数の代わりに都市人口比に自然対数を取った説明変数も統計的に有意と判定され、大都市では副生物の受け皿となる焼肉店などが多いことを示唆する結果が示される一方、食肉禁止の影響を受けなかった沖縄での活用率が高いことが実証された。

終章 まとめと今後の課題

最初の研究の問いに対する答えとして、血液に関しては、奈良時代の食肉禁止令以降、「死」や「血」の穢れ意識が、制度的にも生活意識のなかでも醸成されたことが影響したためか、動物

の血液を食さない文化をもたらし、と畜場では豚と牛を問わず、沖縄のと畜場を除いて廃棄されていた。陰茎、精巣、胆嚢・胆汁、胎盤、副腎などの部位は、豚と牛を問わず、多くのと畜場で廃棄されている。しかし、血液と異なり、内臓肉は食肉禁止令の下でも薬膳として食され、明治期並びに戦前においても食されていたとの記録があり、まったく食されていなかったわけではない。しかしながら、戦後これらの部位が可食部位の指定から外され、また BSE や O157 などの影響で非可食部位に指定されたことで、これらの部位が食されることが減ったものと思われる。中国から導入された本草学も、日本では植物本草となった。このことが、動物の血液や内臓物が薬膳として用いられる道を閉ざした要因の一つとなっている。脳、脊髄、耳介、頭蓋などの部位が、豚と比べ牛で著しく廃棄されているのは、BSE の危険部位に指定されたことが影響している可能性が考えられる。